元朝宮殿の儀式（「元正受朝儀」）次第解説

松田孝一（著）・高田英樹（補）

本稿は、元朝の歴史記録である『元史』の巻 67、礼楽 1 に収録されている、首都大都の宮殿（大明殿）において元旦に行われる儀式、「元正受朝儀」（以下「朝儀」と略す）、すなわち、皇帝が臣下たちから服従の表明を受ける儀式の式次第の記事に訓読を施し、翻訳・解説を試みるものである。

儀式は、明け方の鶏の鳴きまねより開始され、皇帝（カアン）と皇后（カトン）がそれぞれの寝殿から輦に乗って宮殿に入って着座し、ついで文武百官が宮殿前の丹塗りの広場（＝丹墀：図３の【東 D、E】、【西 D、E】の区画）の所定の位置につき、号令に合わせて拝礼と万歳連呼の後、奏楽と舞踊が行われる中、総理大臣（丞相）が皇帝に酒を進め、皇帝が盃を飲み干す場面をクライマックスとして行われるものである。

なお、この儀式は、正月だけでなく、皇帝の誕生日（聖誕節、この朝儀を制定したクビライの場合は旧暦八月二十八日）、および皇帝の即位式においても挙行された。

儀式の内容については、マルコ・ポーロやオドリコにも伝えられており、それらの記録と比較することによって本稿で示されている儀式の細部の理解がより一層深まり、本来の儀式の内容の復元につながることも期待される。本稿は、その基礎資料である。

目次

１．原漢文（『元史』巻 67、礼楽 1）・２．訓読文・３．翻訳文
元正受朝儀
（１）皇帝・皇后の登壇まで
（２）朝儀の開始（儀式進行幹部〔殿前班〕の入場／担当持ち場への分散配置／皇后以外の后妃・皇族及び姻族の祝賀）
（３）百官の入場
（４）進酒の儀礼／奏楽・舞踊
（５）祝賀文・祝賀の礼品目録の言上／各方面及び賓客の祝賀
（６）饗宴

１．原漢文（『元史』巻 67、礼楽 1）

元正受朝儀

（１）皇帝・皇后の登壇まで

前期三日、習儀于聖壽萬安寺。或大興教寺。前二日、陳設于殿庭。至期大昕、侍儀使引導從護尉、各服其服、入至寢殿前、捧牙牌跪報外辦。内侍入奏、出傳制曰「可」、侍儀〔使〕俛伏興。

皇帝出閤陞輦、鳴鞭三。侍儀使并通事舍人、分左右、引擎執護尉、劈正斧中行、導至大明殿外。劈正斧直正門北向立、導從倒卷序立、惟扇置于錡。

侍儀使導駕時、引進使同内侍官、引宮人擎執導從、入至皇后宮庭、捧牙牌跪報外辦。内侍入啟、出傳旨曰「可」、引進使俛伏興。

皇后出閤陞輦、引進使引導從導至殿東門外。引進使分退押直至堊塗之次、引導從倒卷出。俟兩宮升御榻、鳴鞭三、

（２）朝儀の開始（儀式進行幹部〔殿前班〕の入場／担当持ち場への分散配置／皇后以外の后妃・皇族及び姻族の祝賀）

劈正斧退立於露階東。司晨報時雞唱畢、尚引引殿前班、皆公服、分左右入日精、月華門、就起居位、相向立。通班舍人唱曰「左右衞上將軍兼殿前都點檢臣某以下起居」、尚引唱曰「鞠躬」、曰「平身」、引至丹墀拜位、知班報班齊。宣贊唱曰「拜」、通贊贊曰「鞠躬」、曰「拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「都點檢稍前」。宣贊報曰「聖躬萬福」、通贊贊曰「復位」、曰「拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「平身」、曰「搢笏」、曰「鞠躬」、曰「三舞蹈」、曰「跪左膝、三叩頭」、曰「山呼」、曰「山呼」、曰「再山呼」、

凡傳「山呼」、控鶴呼譟應和曰「萬歲」、傳「再山呼」、應曰「萬萬歲」。後倣此。曰「出笏」、曰「就拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「平立」。宣贊唱曰「各恭事」、兩班點檢、宣徽將軍分左右升殿、宿直以下分立殿前、尚厩分立仗南、管旗分立大明門南楹。俟后妃、諸王、駙馬以次賀獻禮畢、

（３）百官の入場

典引引丞相以下、皆公服、入日精、月華門、就起居位。通班唱曰「文武百僚、開府儀同三司、錄軍國重事、監修國史、右丞相、具官無常臣某以下起居」、典引贊曰「鞠躬」、曰「平身」、引至丹墀拜位。知班報班齊。宣贊唱曰「拜」、通贊贊曰「鞠躬」、曰「拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「平身」、曰「搢笏」、曰「鞠躬」、曰「三舞蹈」、曰「跪左膝、三叩頭」、曰「山呼」、曰「山呼」、曰「再山呼」、曰「出笏」、曰「就拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「平身」。

（４）進酒の儀礼／奏楽・舞踊

侍儀使詣丞相前請進酒、雙引升殿。前行樂工分左右、引登歌者及舞童舞女、以次升殿門外露階上。

登歌之曲各有名、音中本月之律。先期、儀鳳司運譜、翰林院譔辭肄之。

丞相至宇下褥位立、侍儀使分左右北向立。俟前行色曲將半、舞旋列定、通贊唱曰「分班」、樂作。侍儀使引丞相由南東門入、宣徽使奉隨至御榻前。丞相跪、宣徽使立于東南、曲終。丞相祝贊曰「溥天率土、祈天地之洪福、同上皇帝、皇后億萬歲壽。」宣徽使答曰「如所祝。」丞相俛伏興、退詣進酒位。尚醞官以觴授丞相、丞相搢笏、捧觴、北面立、宣徽使復位。前行色降、舞旋至露階上。教坊奏樂、樂舞至第四拍、丞相進酒、皇帝舉觴。

宣贊唱曰「殿上下侍立臣僚皆再拜」、通贊贊曰「鞠躬」、曰「拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「平身」。丞相三進酒畢、以觴授尚醞官、出笏、侍儀使雙引自南東門出、復位、樂止。

至元七年進酒儀：班首至殿前褥位立、前行進曲、尚醞官執空杯、自正門出、授班首。班首搢笏執空杯、由正門入、至御榻前跪。俟曲終、以杯授尚醞官、出笏祝贊。宣徽使曰「諾」、班首俛伏興。班首、宣徽使由南東門出、各復位。班首以下舞蹈山呼五拜、百官分班、教坊奏樂、尚醞官進酒、殿上下侍立臣僚皆再拜。三進酒畢、班首降至丹墀。至元十八年十二月二十八日改今儀。

（５）祝賀文・祝賀の礼品目録の言上・各方面及び賓客の祝賀

通贊贊曰「合班」。禮部官押進奏表章、禮物二案至横階下、宣禮物舍人進讀禮物目、至第二重階。俟進讀表章官等、翰林國史院屬官一人、至宇下齊跪、宣表目舍人先讀中外百司表目、翰林院官讀中書省表畢、皆俛伏興、退、降第一重階下立、俟進讀禮物舍人陞階、至宇下、跪讀禮物目畢、俛伏興、退。同降至横階。隨表章西行、至右樓下、侍儀仍領之、禮物東行至左樓下、太府受之。宣贊唱曰「拜」、通贊贊曰「鞠躬」、曰「拜」、曰「興」、曰「平身」、曰「搢笏」、曰「鞠躬」、曰「三舞蹈」、曰「跪左膝、三叩頭」、曰「山呼」、曰「山呼」、曰「再山呼」、曰「出笏」、曰「就拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「拜」、曰「興」、曰「平立」。僧、道、耆老、外國蕃客、以次而賀禮畢、

（６）饗宴

大會諸王宗親、駙馬、大臣、宴饗殿上、侍儀使引丞相等陞殿侍宴。凡大宴、馬不過一、羊雖多、必以獸人所獻之鮮及脯鱐、折其數之半。預宴之服、衣服同制、謂之質孫。宴饗樂節、見宴樂篇。四品以上、賜酒殿上。典引引五品以下、賜酒于日精、月華二門之下。宴畢、鳴鞭三。侍儀使導駕、引進使導后、還寢殿、如來儀。

２．訓読文

元正受朝儀（元正の朝を受くるの儀）

（１）皇帝・皇后の登壇まで

期に前(さき)んずること三日、儀を聖壽萬安寺、或は大興教寺に習う。前んずること二日、殿庭に陳設す。期の大昕に至り、侍儀使、 導從、護尉、各おの其服を服するを引き、入りて寢殿の前に至り、牙牌を捧げ、跪いて外辦に報ず。内侍、入りて奏し、出でて、制して曰く「可なり」と伝ふ。侍儀〔使〕俛き、伏し、興きる。

皇帝、閤を出で、輦に陞り、鞭を鳴らすこと三たびなり。侍儀使并びに通事舍人、左右に分かれ、擎執、護尉を引く。劈正斧、中行し、導かれて大明殿の外に至る。劈正斧、正門に直し、北向して立てられ、導從、倒卷に序立し、惟だ、扇、錡に置かる。

侍儀使、駕を導く時、引進使、内侍官と同(とも)に、宮人、擎執、導從を引き、入りて皇后の宮の庭に至り、牙牌を捧げ、跪いて外辦に報ず。内侍、入りて啟し、出でて、旨して曰く「可なり」と傳ふ。引進使、俛き、伏し、興きる。皇后、閤を出でて輦に陞り、引進使、導從を引き、導いて殿の東門の外に至る。引進使、押直を分け退けて、堊塗の次に至らせ、導從を引きて倒卷せしめ、出ず。兩宮、御榻に升るを俟ち、鞭を鳴らすこと三たびなり、

（２）朝儀の開始（儀式進行幹部〔殿前班〕の入場／担当持ち場への分散配置／皇后以外の后妃・皇族及び姻族の祝賀）

劈正斧、退いて露階の東に立つ。司晨、時を報じ、雞唱畢り、尚引、殿前班の皆な公服するを引き、左右に分け、日精、月華門に入り、起居位に就き、相い向いて立つ。通班舍人、唱えて曰く「左右衞の上將軍の殿前都點檢を兼ぬる臣某以下起居せよ」と、尚引、唱えて曰く、「躬を鞠めよ」と、曰く「平身せよ」と、引きて丹墀の拜位に至り、知班、班、齊うを報ず。宣贊、唱えて曰く「拜め」と、通贊、贊じて曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「都點檢、稍や前め」と。宣贊、報じて曰く「聖躬萬福なり」と、通贊、贊じて曰く「位に復せ」、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」、曰く「平身せよ」、曰く「笏を搢め」と、曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「三たび舞蹈せよ」と、曰く「左膝に跪き、三たび叩頭せよ」と、曰く「山呼せよ」と、曰く「山呼せよ」、曰く「再び山呼せよ」と、

> 凡そ「山呼せよ」を傳うれば、控鶴、呼譟、應和して曰く「萬歲」と、「再山呼」を傳うれば、應じて曰く「萬萬歲」と。後、此れに倣う。

曰く「笏を出だせ」と、曰く「拜に就け」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「平立せよ」と。宣贊、唱えて曰く「各おの恭事せよ」と、兩班の點檢、宣徽將軍、左右に分かれて殿に升り、宿直以下、殿前に分立し、尚厩、分かれて仗の南に立ち、管旗、分かれて大明門の南楹に立つ。后妃、諸王、駙馬、次をもって

賀し、獻ずるの禮の畢るを俟ち、

（３）百官の入場

典引、丞相以下、皆な公服するを引き、日精、月華門を入り、起居位に就く。通班、唱えて曰く「文武百僚、開府儀同三司・錄軍國重事・監修國史・右丞相の具官の常無き臣某以下起居せよ」と、典引、贊じて曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「平身せよ」と、引きて丹墀の拜位至る。

知班、班、齊うを報ず。宣贊、唱えて曰く「拜め」と、通贊、贊じて曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「拜め」と、曰「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「平身」と、曰く「笏を搢め」と、曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「三たび舞蹈せよ」と、曰く「左膝に跪き、三たび叩頭せよ」と、曰く「山呼せよ」と、曰く「山呼せよ」と、曰く「再び山呼せよ」と、曰く「笏を出だせ」と、曰く「拜に就け」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「平身せよ」と。

（４）進酒の儀礼／奏楽・舞踊

侍儀使、丞相の前に詣り、進酒を請い、雙引して升殿す。前行の樂工、左右に分れ、登歌者及び舞童、舞女を引き、次を以て殿門の外の露階の上に升る。

登歌之曲に各おの名あり、音は本月之律に中る。期に先んじて、儀鳳司、譜を運び、翰林院、辭を譔し、之を肄(なら)う。

丞相、宇下の褥位に至って立ち、侍儀使、左右に分かれて北向して立つ。前行の色曲が将に半ばならんとし、舞旋、列定まるを俟ち、通贊、唱えて曰く「班を分けよ」、樂、作す。侍儀使、丞相を引きて南東門由り入り、宣徽使、奉隨して御榻の前に至る。丞相、跪き、宣徽使、東南に立ち、曲、終わる。丞相、祝贊して曰く：「溥天率土に、天地之洪福を祈り、同に皇帝、皇后の億萬の歳壽を上(たてまつ)らん」と。宣徽使、答えて曰く：「祝うところの如し」と。丞相、俛き、伏し、興き、退きて進酒の位に詣る。尚醞官、觴を以て丞相に授け、丞相笏を搢み、觴を捧げ、北面して立ち、宣徽使、位に復す。前行の色降り、舞旋、露階の上に至る。教坊、奏樂し、樂舞、第四拍に至り、丞相、進酒して、皇帝、觴を舉ぐ。

宣贊、唱えて曰く「殿上下の侍立せる臣僚、皆な再拜せよ」と、通贊、贊じて曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「平身せよ」と。丞相、三たび進酒して畢り、觴を以て尚醞官に授け、笏を出だし、侍儀使、雙引して南東門より出で、位に復し、樂、止む。

至元七年の進酒の儀：班首、殿前の褥位に至って立ち、前に進曲を行い、尚醞官、空杯を執り、正門自り出で、班首に授く。班首、笏を搢み、空杯を執り、正門由り入り、御榻の

前に至って跪く。曲終わるを俟ち、杯を以て尚醞官に授け、笏を出だし、祝贊す。宣徽使、曰く「諾」と、班首、俛き伏し興きる。班首、宣徽使、南東門由り出でて各おの位に復す。班首以下、舞蹈、山呼し、五たび拜し、百官、班を分け、教坊、樂を奏で、尚醞官、酒を進め、殿上下の侍立する臣僚皆な再拜す。三たび進酒して畢り、班首、降りて丹墀に至る。至元十八年十二月二十八日、今儀に改む。

（５）祝賀文・祝賀の礼品目録の言上・各方面及び賓客の祝賀

通贊、贊じて曰く「班を合わせよ」。禮部官、進奏表章、禮物二案を押して横階の下に至り、宣禮物舍人、進んで禮物目を讀み、第二重階に至る。表章を進讀する官等、翰林國史院屬官一人、宇下に至って齊しく跪くを俟ち、宣表目舍人、先ず中外百司の表目を讀み、翰林院官、中書省の表を讀みて畢り、皆な俛き、伏し、興き、退いて、第一重階の下に降りて立つ。進讀禮物舍人、階を陞って宇下に至り、跪いて禮物目を讀みて畢り、俛き、伏し、興き、退くを俟ち、同に降りて横階に至る。表章、西行して右樓の下に至り、侍儀、仍お之を領し、禮物、東行して左樓下に至り、太府、之を受くに隨い、宣贊、唱えて曰く「拜め」と、通贊、贊じて曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「平身せよ」と、曰く「笏を搢め」と、曰く「躬を鞠めよ」と、曰く「三たび舞蹈せよ」と、曰く「左膝に跪き、三たび叩頭せよ」と、曰く「山呼せよ」と、曰く「山呼せよ」と、曰く「再び山呼せよ」と、曰く「笏を出だせ」と、曰く「拜に就け」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「拜め」と、曰く「興せ」と、曰く「平立せよ」と。僧、道、耆老、外國蕃客、次を以て賀するの禮、畢り、

（６）饗宴

諸王、宗親、駙馬、大臣を大會せしめ殿上に宴饗し、侍儀使、丞相等を引き、陞殿して宴に侍る。凡そ大宴するに、馬、一を過ぎず、羊多きと雖も、必ず獸人獻ずるところの鮮及び脯鱐を以て、其數之半ばを折す。預宴之服、衣服の制と同じくし、之を質孫と謂う。宴饗の樂節、宴樂篇を見よ。四品以上、酒を殿上に賜う。典引、五品以下を引き、酒を日精、月華二門の下に賜う。宴、畢り、鞭を鳴らすこと三たびなり。侍儀使、駕を導き、引進使、后を導き、寢殿に還ること、來儀の如し。

３．翻訳

凡例

1. （＝文字）:「文字」は『元史』の本文の表記を示している。
2. （文字）、〔文字〕:「文字」は訳者の補足である。
3. 文字 :「文字」は朝儀の儀式進行の係員である。対照を容易にするために囲んだ。
4. 【英文字など】: 図３「皇元朝儀之図」の再構成図における「区画」を表す。
5. ***64*/25~26**：数字は図３の外枠の目盛りの数字、斜体は横軸、正体は縦軸の数字を示す。

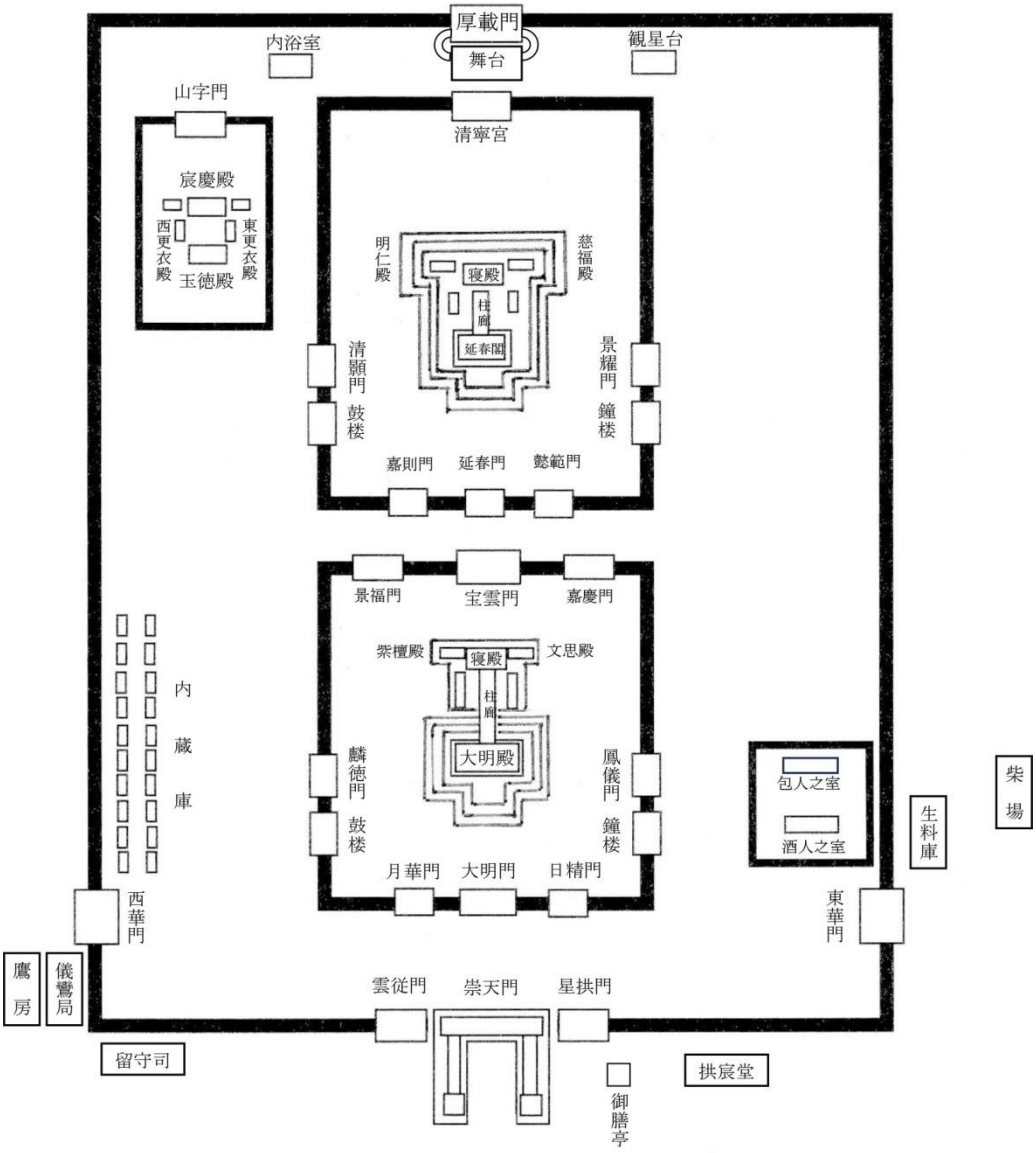


図１．大都宮城図（朱偰『元大都宮殿図考』商務印書館、1936、北京古籍出版社、1990 の付図「元宮城図」に基づく）

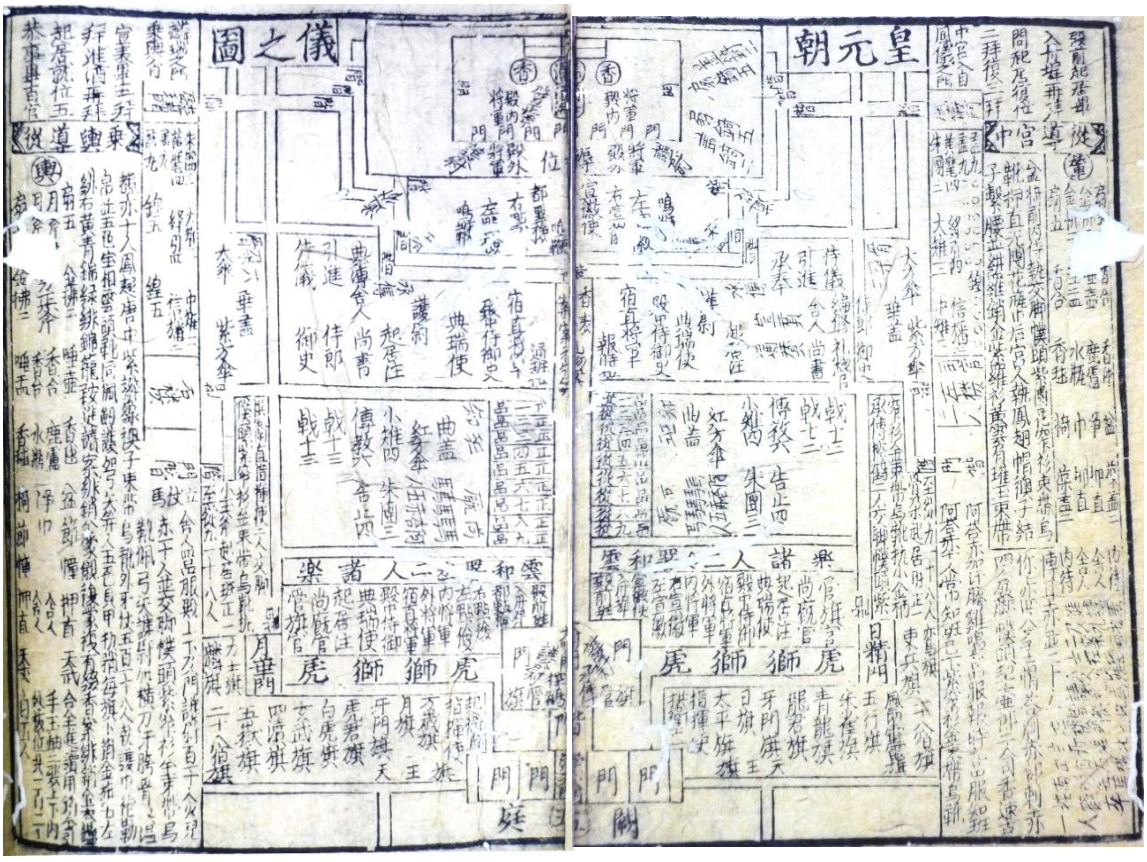


図２．陳元靚撰『事林広記』（宗家旧蔵、長崎県立対馬歴史研究センター所蔵、元刊本）別集、巻８「皇元朝儀之図」

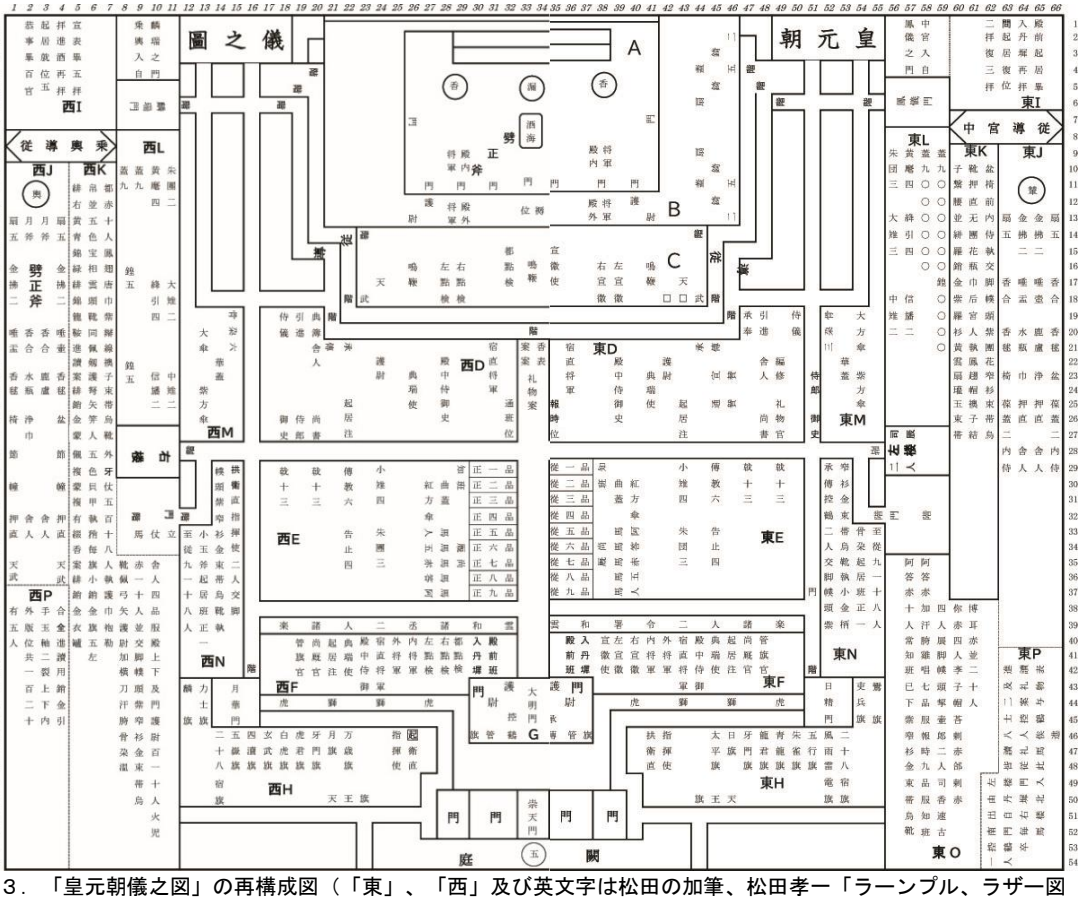


図３．「皇元朝儀之図」の再構成図（「東」、「西」及び英文字は松田の加筆、松田孝一「ラーンプル、ラザー図書館所蔵『歴史集成』（『集史』）写本「元朝宮殿図」簡報」『内陸アジア史研究』32 号、2017、54-55 を参照）

元正受朝儀（元旦に臣下の朝賀を受ける儀式〔の次第〕）

（1）皇帝・皇后の登壇まで

（朝儀実施の）期日前の 3 日目（つまり 2 日前）に、（大都城内の）聖寿万安寺あるいは大興教寺で、儀式の予行演習をする。2 日目（前日）に、宮殿（大明殿）の前広場で設（しつら）えを行う。当日、夜明け（＝大昕）になると、侍儀使（儀典長）は、皇帝のお供（＝導従）たちや警護隊（＝護尉[1]）、それぞれ所定の服を身に着けているものたちを引率して、（宮城内に）入って（皇帝の）寝殿[2]の前に至り、（自身の身分を示す）牙牌（象牙製の札、象牌ともいう）

---

[1] 護尉は警護のひとたち、今でいう SP。皇帝（カアン）の常設の親衛隊（ケシクテン）を構成する 3 部隊のうち、有力者の子弟で編成された「質子兵（トルカウト）」の部隊からの 20 名など 40 名で構成し、宮殿の庇の前にある雨の当たる階段（＝露階、**【B】**）と**【C】**の境の階段）の東西両端に立って警備を行う（『元史』巻 80、輿服志 3、儀衛）。**【B】**（宮殿の南側の庇の下の部分）の他、**【G】**（大明門）に護尉の表記がそれぞれ 2 か所、その他**【東 D】**、**【西 D】**にそれぞれ 1 か所あり、要所に何カ所か配置されていたことになる。

[2] 皇帝の「寝殿」は、朱偰の復元する図 1 によると、大明殿の北側背後と、大明殿北隣の「延春閣」の北側背後の 2 か所にあった。朝儀の際の皇帝、皇后の行列の出発点となった寝殿は、注 5 と注 10 で示しているように、行列が大明殿の境外から、境内に入っているから、大明殿の北側背後の寝殿ではない。境域外の寝殿、すなわち延春閣の北側背後の寝殿であった

を捧げ持って跪いて、（寝殿の）守衛（＝外辦[3]）に（お迎えに参上したことを）知らせる。（それを受けた寝殿の）内侍（という係員、【東 J】に表示がある）が（寝殿に）入って（皇帝にお迎えの到着を）申し上げ、（内侍が寝殿から）出て、「皇帝は「可し」と言われた」と伝え、侍儀使は（それを聞いて）俯き、伏し、起きる（という所作の儀礼を行う）。

皇帝が寝室（＝閤、大明殿の北隣りにある「延春閣」）を出て御車（＝輦、【西 J】、【西 K】の上方には「輿」と表記されている）に乗られると、鞭を３度鳴らす（鳴鞭という係員）がいる。〔【C】に三か所表記がある〕。侍儀使ならびに通事舎人（という儀式係）は（行列一行の）左右に分かれ、警備人（＝擎執）、護衛兵を引率する。（天下の不正を正す象徴である）劈正斧（へきせいふ）（刃が、巨大な青い宝石で作られた斧[4]）が行列の中央を進み、導かれて大明殿の外に至る[5]。劈正斧は真っ直ぐ正門に、北を向いて立てられ、お供たちは前から後ろへ広がって（=倒巻[6]）順序通りに立ち[7]、ただ、（行列の中で運ばれていた）扇だけは（宮殿東側にある所定の扇の）台（扇錡[8]）に置かれる。

侍儀使が（皇帝の）御車を導いていく間に、引進使（【東 D】に記載）は内侍（という官【東 J】、【東 K】に記載）といっしょに、皇后の執事たち（＝宮人）、警備人（＝擎執）、お供（＝導従）を引率して、（宮城内に）入って皇后の宮殿の前の広場に至り、牙牌を捧げ持って跪いて、（寝殿の）守衛（＝外辦）に（皇后にお迎えに参上したことを）知らせる。（それを受けた寝殿の）内侍が（寝殿に）入って（皇后にお迎えの到着を）啓しあげ、（内侍が寝殿から）出て、「皇后は「可し」と言われた」と伝え、引進使は（それを聞いて）俯き、伏し、起きる（という所作の儀礼を行う）。

と考えられる。

[3] 外辦の意味としては、「警衛宮禁。亦指警衛宮禁的官員（『新華字典』）」という説明があるのでそれに従う。日本語としては「守衛」が適当か。

[4] 「劈正斧」については、松田孝一、前掲書、51-56 を参照。【西 J】の輿表記の下方 2 段目に「劈正斧」の文字があり、行列の中央を進む劈正斧の位置を示している。また、【A】（宮殿内部）の左よりの場所に「劈正斧」の文字がある（図４参照）。劈正斧は本文では、宮城内に入った後、宮殿の外で北向きに置かれるとしており、【A】に示されている宮殿の内の位置取りは、本文と一致していない。

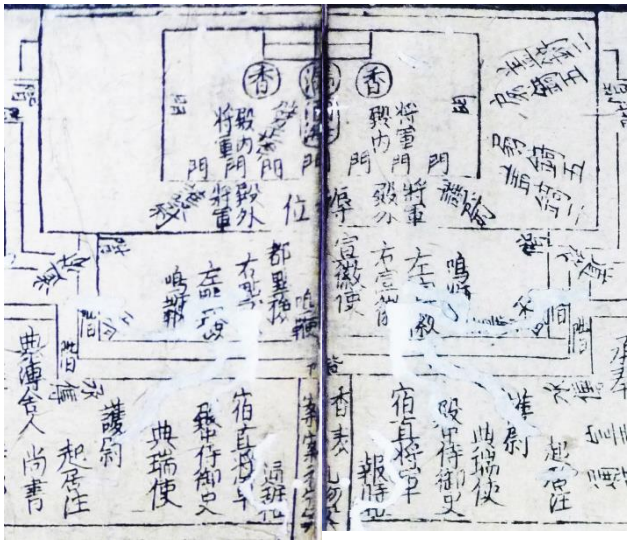
[5] 皇帝が大明殿に入るルートについての説明は、この「元正受朝儀」の記事にはないが、図３の【西 L】の上方に「乗輿、麟瑞之門より入る」と記載されており、その記載の下方の同名の門を通って大明殿の境内を囲む外壁外から境内に入ることが示されている。

[6] 「倒巻」は、前から後ろへ、または、下から上に巻き上げることをいう。

[7] 「お供（＝導従）」は皇帝（カアン）や皇后（カトン）の移動の際に前や後ろで歩く行列一行を指す。【C】の左端の左の階段にほぼ逆さまの方向に「導従」の文字の記載がある。皇帝のお供たちはこの文字の左側の白い空白の区画に並んだのであろう。
また、【西 J】、【西 K】の上方に「乗輿導従」の文字があり、【西 J】にそのお供（＝導従）の一行の内容が記載されている。これは行列の並びを示していると思われる。【西 K】は、それらお供の服装を説明している。

[8] 「扇錡」は、【B】に「扇錡五」の表記が 2 か所ある（図４を参照）。そして「乗輿導従」の【西 J】の最上段（最前列と思われる）に「扇五」の表記が 2 つ並んでいる。皇帝の行列の最前列に扇が 5 面捧げられ、それが宮殿到着後は、宮殿の東側の台の上に置かれるということと理解される。

皇后が寝室（＝閤）を出て御車に乗り、引進使はお供を引いて[9]、導いて（大明）殿の東門（鳳儀門のこと[10]、【東 L】の上方に隣接）の外に至る。引進使は、（最後尾の）押直[11]を（左右に）分けて下がらせて堊塗（白塗り）の次（停止位置）に至らせて（止まらせると）、（その続きに）お供たちを引率して行き、前から後ろへ順序通りにして[12]（列から）出る。（皇帝と皇后の）両宮が御座（＝御榻）に昇られるのを待って、鞭が三度鳴らされると、



宮殿内、中央最上部
・横長の「曰」字：皇帝（カアン）と皇后（カトン）の御座（＝御榻）のおかれる場所。
宮殿内、中央部折り目の部分、上から
・「漏」：漏刻（水時計）
・「酒海」：酒を入れた巨大な甕
・「門」
・褥位：拝礼する位置
宮殿内、折り目の左、上から
・「香」：香炉
・劈正斧：天下の不正を正す象徴
・殿内将軍：宮殿内の警備長官
宮殿外、右
・蓋錡：天蓋を置く台
・扇錡：扇を置く台

図４．大明殿内の器物・人員配置

（２）朝儀の開始（儀式進行幹部〔殿前班〕の入場／担当持ち場への分散配置／皇后以外の后妃・皇族及び姻族の祝賀）

劈正斧は下がって（宮殿前面の）庇のない階段（＝露階【B】）と【C】の境の階段）の東に立つ。（夜明けの時刻を鶏の鳴き声（コケコッコ）で知らせる係の）司晨[13]が（左楼で）時を報せ、（その）時を

---

[9] 【東 J】、【東 K】の上方に「中宮導従」という表記があり、【東 J】がその行列の内容、【東 K】でかれらの服装が解説されている。

[10] 【東 L】の上方に「中宮、鳳儀門より入る」との記載がある

[11] 「押直」は行列の中の人員の名称。皇帝と皇后の御供に各 2 員いる。図３では皇帝の行列（乗輿導従）の【西 J［*1*/32~33, *4*/32~33］】に「押直」と記載されている。また皇后の行列（中宮導従）の【東 J ［*64*/25~26, *65*/25~26】に「押直」が 2 カ所配置されている。

[12] 【C】の右端の右の階段に右倒しの文字で「導従」の記載がある。皇后のお供（＝導従）たちはこの文字の右側の白い空白の区画に並んだのであろう。

[13] 「晨」は夜明けの意。「司晨（夜明けを司る）」係は、『元史』巻 80、輿服志 3、儀衛では、「司辰郎」と表記し、定員は二人おり、一人は 6 品官の服で、もう一人が 8 品官の服を着用することとなっており、6 品服の者は東 L の下方に隣接する「左楼」の上に立って、時の到来を待ち構えて、この場合、劈正斧が露階の下に降りるのを待ち構えて、北面して鶏唱を行い、また、もう一人の 8 品服の者は、左楼の下で待機していて、（おそらく鶏唱を聞いた後）、牙牌を捧げて、丹墀に走って出て、（時刻が来たことを）知らせる。図３では、「左楼」の区画内に「司辰」の文字が書かれているのは、この『元史』の記事に対応するものであろ

告げる鶏の鳴き声（＝鷄唱）が終り、尚引（という係員）が宮殿前で（定められた）公服を着ている（儀式の運営に当たる）殿前班[14]（という役員たちのグループ）を引率して、東西に分けて、（【東F】に隣接する）日精門及び（【西F】に隣接する）月華門を入り、（宮殿正面に向かって礼拝する時の各役員所定の場所である）起居位【東 F・西 F】につき、（東西から）相向かって立つ。

（宮殿下で執務に当たる）通班舎人（という係員〔通班【東 D】〕）が号令して「左右衛の上将軍兼殿前（班の）都点検の臣某以下（の殿前班の全員）よ、起居（拝礼の動作：立ったり座ったりの拝礼を）せよ」と言う。尚引が号令して「身をかがめよ」、「起立して直れ（＝平身）」と言い、（殿前班を）引率して、（宮殿前の露階【B】と【C】の境）の階段を下りた前庭〔＝丹墀【東D、E】、【西D、E】〕の拝礼をする所定の位置（＝拝位）に至り、知班（という係員【東F・西F】）が「班が整いました」と知らせる。宣賛（という係員【東D】）が号令して「拝め」と言い、通賛（という係員【東D】）がそれに合わせて「身をかがめよ」、「拝め」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「都点検（という儀式進行管理の高官）少し進め」と言う。宣賛がそれにあわせて「聖なる身に萬福あれ」とつげる。通賛がそれにあわせて「（もとの拝）位に戻れ」、「拝め」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「起立して直れ（＝平身）」、「笏を（帯に）差し挟め（＝搢笏）」、「身をかがめよ」、「三度舞踏せよ」、「左膝をついて、三度叩頭せよ（頭を床ないしは地面につけよ）」、「山呼せよ」、「山呼せよ」、「二回山呼せよ」と言う。

> 凡そ「山呼せよ」の声が聞こえれば、（皇帝の儀仗隊である）控鶴【G】は大声を挙げて声を合わせ「万歳」と言い、「再山呼せよ」の声が聞こえれば、（それに）応じて「万々歳」と言う。後はこれと同じようにする。

「笏を出だせ」、「拝位につけ」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「起立して直れ（＝平立）」と（続けて）言う。

宣賛が号令して「それぞれ慎んで任務につけ（＝恭事）」と言い、（東西の）両班の点検（という指揮官【C】）と宣徽将軍（宣徽使【C】）は東西に分かれて宮殿に昇り、宿直（という指揮官【東D・西D】）以下は分かれて宮殿前に立ち、尚廏（という馬引きたち【東E・西E】）は分かれて儀仗の南に立ち、管旗のものたち【G】は分かれて大明殿の南の柱（の付近）に立つ。后妃、諸王、駙馬（チンギス・カン家の女性の婿）たちの序列に従った（皇帝への）祝賀と献上の禮が終わるのをまって、

（３）百官の入場

う。また【東E】に「報時位」とあるのは、8品服の司辰が走って出て、時刻が来たことを知らせる場所を示しているものと思われる。ただ、【東O】には、「鷄唱七品服、報時九品服」と書いており、着る服装が一品低いランクのものになっている。

[14] 【東F】、【西F】（起居位）に「殿前班は丹墀に入る」との記載とともに「殿前班」のメンバーの職名が記入されている。

典引（という係員）が、みな公服をまとった丞相以下（の官）を先導して、日精・月華門を入り、起居位につく[15]。通班（という係員【西 D】）が号令して「文武百僚よ、開府儀同三司・録軍國重事・監修国史の右丞相の特別官位（＝具官無常）の臣某以下、起居せよ」と言い、典引がそれに合わせて「身をかがめ」、「起立して直れ（＝平身）」と言い、（その後、みなを）引率して丹墀の拝位に至る。

知班が「班は斉いました」と知らせる。宣賛が号令して「拝め」と言い、通賛が合わせて「身をかがめ」、「拝め」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「起立して直れ（＝平身）」、「笏を（帯に）差し挟め」、「身をかがめ」、「三度舞踏せよ」、「左膝をついて、三度叩頭せよ」、「山呼せよ」、「山呼せよ」、「再山呼せよ」、「笏を出せ」、「拝（位）につけ」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「起立して直れ（＝平身）」と言う。

（４）進酒の儀礼／奏楽・舞踊

侍儀使（二員いる。〔侍儀【東 D・西 D】〕）が丞相の前に参り、（皇帝への）進酒を請い、丞相の両側で引いて宮殿に昇る。前を行く楽隊（もとの待機位置は、【東 F、西Ｆ】の上方に隣接する区画）が左右に分かれ、御殿歌の歌手（＝登歌者）及び舞童、舞女を引率し、順次宮殿の門外の露階の上に昇る。

御殿歌の曲にはそれぞれ題名があり、音はその月ごとの所定の旋律（＝本月之律：12 か月それぞれに決まった曲律があった）にあたる。（演奏演舞の開始の）前に、儀鳳使司（という役所）は、譜面を運び、翰林院（勅令文作成部局）が作詞してそれを練習しておく。

丞相が（宮殿の）庇下の敷物のおかれている場所（＝褥位【B】）に至って立ち、（二員の）侍儀使は左右に分かれて北向き（皇帝の方向）に立つ。前奏の音曲（＝色曲）がちょうど半ばになった時に、舞旋の列が決められた配置になるのを待って、通賛が号令して「班に分かれよ」と言い、奏楽する。侍儀使が丞相を引率して、南東の門より入り、宣徽使がうやうやしく付き従って皇帝・皇后の御座の前に至る。丞相が跪き、宣徽使が（その）東南に立ち、曲（の演奏）が終わる。丞相が祝賀して「天が下、国土の果てまで、天地の洪福を祈り、ともに皇帝、皇后の億万歳の長命を上（たてまつ）らん」と言う。宣徽使がそれに応じて「お祝いするところの通り」と言う。丞相は俯き、伏し、起き上がり、退いて進酒する位置に至る。尚醞官（酒係）が盃を丞相に渡し、丞相は笏を（帯に）差し挟み、盃を捧げ持って、北面して立ち、宣徽使は（もとの）位置に戻る。

前奏の音曲（＝色〔曲〕）が終わり、舞旋が露階の上に至る。合奏団（＝教坊）が楽を奏で、〔音〕楽と舞〔旋〕が第四番目のリズム（＝第四拍）のところに至ると、丞相が酒を進め、皇帝が盃を挙げる。宣賛が号令して「宮殿の上下に侍り立つ臣僚よ、皆な二度拝め」と言い、通賛がそれに合わせて「身をかがめ」、「拝め」、「身を興せ」、「拝め」、「興せ」、「起立して直れ

[15] 起居位は、【東 F】、【西 F】の区画全体とみなされる。

（＝平身）」と言う。丞相は三度の進酒を行い、（それが）終わり、盃を尚醞官に渡し、笏を出し、（二員の）侍儀使が両側から（丞相を）引率して南東の門から出て、元の位置にもどり、〔奏〕楽が終わる。

至元七年（の最初の朝儀）の進酒の儀では「班首が宮殿前の褥位に至って立ち、前奏して曲を進め、尚醞官が空杯を執り、正門より出て、それを班首に渡す。班首は、笏を（帯に）はさみ、空杯を執り、正門より入り、御座の前に至って跪く。曲が終るのを待って、杯を尚醞官に渡し、笏を出し、祝賀する。宣徽使は「その通り」と言い、班首は俯き、伏し、興きる。班首と宣徽使は南東の門から出て、それぞれの定位置に戻る。班首以下は舞蹈、山呼をし、拜を五回行い、百官は班ごとに分かれ、教坊は音楽を奏で、尚醞官は進酒し、宮殿の上下の侍り立っている臣僚たちは皆な二度拝す。三度の進酒が終わり、班首が降りて宮殿前庭に至る。至元十八年十二月二十八日、現在の儀式次第に改めた。

（５）祝賀文・祝賀の礼品目録の言上・各方面及び賓客の祝賀

通賛がそれに合わせて「班を合わせよ」と言う。礼部の官が進奏の表章（書付け）と礼物を置く二台の机（＝案、【東 D】と【西 D】の間に中央通路に置かれている）を押して、（宮殿の）横階段の下に至り、宣礼物舎人（という係員）が進んで「礼物目録」を読み上げ、第二重階に至る。「表、章」を進読する官等と翰林國史院の屬官一人が宮殿の庇の下に至って全員が跪くのを待って、宣表目舎人（という係員）が先ず中外百司の表目を読み、（次に）翰林院官が中書省の表を読み、終わると、皆な俯いて、伏して、興き、退いて、第一重階の下に降りて立つ。進読礼物舎人（という係員）が、階段を上って庇の下に至り、跪いて礼物目録を読み、終わり、俯いて、伏して、興き、退くのを待って、ともに降りて横階に至る。表章が西に行き、右楼（【西 L】の下方に隣接）という建物の下に至り、侍儀（使）がなおこれ（表と章）を受け取り、礼物が東に行って左楼（【東 L】の下方に隣接）という建物の下に至り、太府がこれ（礼物）を受けとるにしたがい、宣賛が号令して「拝め」と言い、通賛が合わせて「身をかがめよ」、「拝め」、「興せ」、「起立して直れ（＝平身）」、「笏を（帯に）差し挟め」、「身をかがめよ」、「三度舞踏せよ」、「左膝をついて跪き三度叩頭せよ」、「山呼せよ」、「山呼せよ」、「再山呼せよ」、「笏を出せ」、「拝位につけ」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「拝め」、「興せ」、「起立して直れ（＝平立）」と言う。僧侶、道士、耆老、外国蕃客が順次（皇帝、皇后に）祝賀する礼が終わり、

（６）饗宴

諸王・宗親・駙馬・大臣を大会させ、宮殿上で饗宴し、侍儀使は、丞相等を引率して殿に昇って宴に侍る。およそ大宴するときに、（食べられる）馬は一頭を超えないが、羊は多いと雖も、必ず狩猟人（＝獣人）が献上した鮮魚及び干し魚・干し肉で其の半分の数に充てる。宴に預る場合の服は（儀式の）衣服の規定と同じもので、それをジスン（質孫）という。饗宴の時の音楽は、宴楽編（という規則）を見よ。四品以上（の官僚）は宮殿上で酒を賜る。典引が五品以下の官僚を引率して、日精・月華の二門の下で酒を賜る。宴が終わると、鞭を三度鳴らす。侍

儀使が（皇帝の）御車を導き、引進使が皇后の（御車）を導いて、寝殿に還る場合の次第は来るときの通りである。